

# 上黒岩岩陰の石器組成の分析

Analysis of the Composition of Stone Implements  
from the Rock Shelter of Kamikuroiwa

綿貫俊一

WATANUKI Shun'ichi

はじめに

- ① 上黒岩岩陰遺跡の概要と分析資料
- ② 上黒岩岩陰出土遺物の層位的変化
- ③ 高知平野・松山平野周辺の石器・石材組成
- ④ 上黒岩岩陰遺跡出土の自然遺物
- ⑤ 上黒岩岩陰に居住した人々の領域

結論

## 【論文要旨】

旧石器時代後期の遊動生活から、半定住生活、定住生活へと生活・居住の形が次第に変化したのが縄文時代であるといわれている。その一方で遺物量、岩陰の狭小性などから四国山地の高原にある上黒岩岩陰のように定住的な生活の場所としての利用が考えられない遺跡もある。そこで上黒岩岩陰で具体的にどのような生活が行われ、半定住集落や定住集落が形成されていくなかで上黒岩岩陰の性格とはなにかを詳らかにするために、出土した石器と石器石材の組成について観察した。これまで定住集落を認定する際、磨石・敲石類の増加と竪穴住居・土坑などの存在に注意が払われてきた。住居・集落が固定しない旧石器時代の遊動社会・集落と違って、定住的な社会においては塩・翡翠・磨製石斧・黒曜石などで代表されるように遠隔地間の物流が活発化・安定化している。このような視点から上黒岩岩陰や周辺遺跡での遠隔地石材の比重を観察した。

石材組成の観察結果、おそくとも上黒岩岩陰6層の頃から遠隔地産石器石材の増加が窺え、以後久万高原地域の遺跡や平野部周辺でも縄文時代を通じた推定遠隔地産石材が安定的に移入されている。したがって上黒岩岩陰6層以降に定住的な社会の到来を推定し、それ以前を半定住的な段階であると考えた。

【キーワード】 石器・石材組成、半定住・定住、短期のキャンプ、生業

## はじめに

旧石器時代は遊動的な狩猟・採集社会で、縄文時代は定住が始まり、後半期以降に若干の栽培が行われた狩猟・採集社会であるというのが一般的な理解である。とりわけ縄文時代草創期は旧石器時代的な石器を含みながら狩猟具の変革が見られることと、土器や石皿・磨石のなどの増加に示される植物性食物調理具の変革に見られるように旧石器時代から縄文時代への移行過程と考えられる〔稲田1986〕。この文脈のなかで理解されるのが縄文時代草創期初頭の長者久保・神子柴段階以降～隆起線土器段階以前に位置づけられる東京都前田耕地遺跡の住居址や〔佐々木1991〕、草創期中葉～後葉に位置づけられる南九州隆帯土器段階の住居址・煙道付炉穴である〔雨宮・上東・福永1999〕。このような事例から定住社会の成立を縄文時代草創期と考える研究者と〔雨宮1996〕、縄文時代早期に小規模遺跡が多いことから押型土器段階以降、早期末・前期初頭と新しく考える研究者もいる〔春成1983:21〕。

一方で住居についてはフランス下部旧石器時代テラアマタ遺跡で晩春～初夏の住居址が見つかったり、ロシアでは堅穴を掘った住居址や獣骨を積み上げて構築した住居址が上部旧石器時代の遺跡に多く見られることから〔ボリスコフスキー1961〕、住居の存在自体が定住の存在を証明する充分条件でないことは明らかである。また小規模遺跡が拠点・大規模遺跡に比べて多いのは旧石器時代から縄文時代にかけて通常みられるし、弥生時代以降についても大規模遺跡と小規模遺跡が存在している。こうした集落の居住形態については多くの研究例がある。例えばビンフォードが民族事例から分類した集落と移動のパターンをみると、フォレジャー型（移動キャンプ型：ベース・キャンプの有無で細分）、コレクター型（拠点回帰型）、定住村落型（通年居住型）に区分している。この分類は移動キャンプ型のうち、ベース・キャンプの無いパターンを除きいずれの場合も中心的集落と、衛星的なキャンプ地からなるが〔Binford 1980〕、実際の遺跡に対応させるのは困難である。渡辺仁も民族事例を参考に狩猟採集民の居住形態をⅠ型～Ⅴ型に区分した。そのうちⅠ型は住居を固定しないブッシュマンの集落を思わせる遊動型、Ⅱ型が半遊動型、Ⅲ型が半定住型、Ⅳa型とⅣb型は本拠移転型の定住型、Ⅴ型は本拠固定型と区分した〔渡辺1990〕。そのうえで本拠固定と本拠移転、家族本拠と猟漁小屋、泊り場固定と泊り場不定などの違いで細分しており、Ⅱ型・Ⅲ型が遊動型と定住型への移行型と理解している。渡辺の分類も民族事例に立脚する点では説得力があるが、実際の遺跡に当てはめるのは困難である。

また林謙作は1970年に「筆者は季節的移住を否定するわけではない。いわゆる「大貝塚」あるいは「大遺跡」の周辺に点在する「小貝塚」、「小遺跡」のなかには、季節的・一時的な性格のものがふくまれているだろうと考えている。」と小規模遺跡の存在を示唆していた〔林2001（初出1970）:222～230〕。その後の論文では、集落を遊動と定住に区分し、縄文時代草創期前葉～中葉の定住集落は成立しておらず、定住の変遷については成立期を経て普及期に至る過程を考えるなかで、定住に係る貯蔵も「成立段階→確立段階→変成段階」の重層的な変遷を考えた。林はこうした変遷観を考えつつ南九州や関東地方など比較的早く成立段階が始まった地域や、北日本や本州中央部などではやや遅れて成立段階が始まるという地域差を見出した〔林2004:222～230〕。林の見解は拠

点的な中心集落の変遷について説明しているが、1970年段階の見解を発展させているわけではなく、衛星的なキャンプ地・上黒岩のような遺跡と拠点遺跡からなる遺跡群構造の意義については触れていない。また山崎純男は稲作農耕開始期における土器片が少量見つかった小遺跡を丹念に集め、これを拠点の定住遺跡に対する「出作り小屋」とであると評価し、農村集落の構造を把握した〔山崎2003〕。

旧石器時代末から縄文時代前期までの間において、集落の居住形態が遊動型集落から定住型集落へ緩やかな質の変貌をしながら変化することはほぼ共通する理解である。しかし拠点集落と衛星的なキャンプ地からなる関係は弥生時代以降においても観察され、時代を画一的に遊動社会と定住社会・半定住社会の視点から実際の遺跡を区分するのは困難であろう。本論では拠点の遺跡について、季節的に移動するものの頻繁な状況ではない場合を暫定的に半定住とし、通年居住を定住と仮定する。同様に、拠点の遺跡でない場合を、色々な目的から利用された衛星的な短期キャンプであると仮定する。

本稿で採りあげる上黒岩岩陰は岩陰遺跡で、報告書に提示された平面図と土層断面図の観察から雨垂れ線内のスペースが極めて狭いことが分かる〔春成・小林編2009〕。この遺跡では、縄文時代草創期から中世までの間に断続的に利用されたことが分かっているが、いずれの時期においても中心的な集落を想定できない衛星的なキャンプ地であり、極めて短期の利用に係る滞在地である可能性が遺物の数量などからみて考えられる。おそらく移動社会から定住社会、狩猟・採集社会から農耕社会へ、拠点集落の居住・生業形態が変化する中で岩陰利用の目的も変化してきたと推定されるが、このことは狭小な居住スペースしかなかった他の洞穴・岩陰遺跡に共通したものであったろう。このような視点から周辺遺跡の状況のなかで上黒岩岩陰から窺える半定住・定住社会とはどのようなものか、縄文時代草創期～早期を中心に観察してみたい。

## ①……………上黒岩岩陰遺跡の概要と分析資料

上黒岩岩陰遺跡のある久万高原地域は標高1,000m前後の山々が連なり、その山あいには標高400～500mの小丘陵や低地部が川筋に沿って展開する地域である。久万高原地域の河川は太平洋へ注ぐ仁淀川の水系である。上黒岩岩陰遺跡の西側を北流する久万川も仁淀川の支流で、川を挟む山との比高差が約200mもある山深い場所である。上黒岩岩陰遺跡は東側の山塊から久万川方向へ延びる尾根（石灰岩）の南面する裾部（標高約399m）に立地する。

岩陰内に堆積する層位は発掘調査年次によって微妙に異なる部分があるが、報告書では次のように整理されている〔春成・小林編2009〕。

1 層	表土	9-1 層	黄褐色土層	隆起線文土器
2 層	黄褐色土	9-2 層	9層第1黒色土層	隆起線文土器
3 層	褐色土含礫	9-3 層	黄褐色土層	隆起線文土器
4 層	第1黒色土層 混貝土層 押型文土器	9-4 層	9層第2黒色土層	隆起線文土器
5 層	第1破碎礫層	9-5 層	褐色土層	隆起線文土器

6 層 第2黒色土層	無文土器	10 層 青褐色土層
7 層 第2破碎礫層	A区隆起線文土器	11 層 第3破碎礫層
8-1 層	隆起線文土器	12 層 青褐色粘土層
8-2 層	隆起線文土器	13 層 第4破碎礫層
8-3 層	隆起線文土器	14 層 青褐色粘土層

まず各種の概報・報告に記された上黒岩岩陰に関する出土土器を新しいほうから古い方へ並べると次のようになる。

1層? : 中世 : 土師器, 1層? : 古墳時代初頭の古式土師器, 1層? : 弥生時代前期の土器, 1層 : 弥生早期 : 刻目突帯文, 1・2層 : 縄文後期中津式・中津Ⅱ式, 3・4層 : 縄文中期船元Ⅰ式 / 羽縄文前期島下層Ⅰ式, 1・3層 : 縄文前期轟2式, 3・4層 : 縄文早期茅山下層式 / 塞ノ神式 / 手向山・穂谷式 / 高山寺・田村式 / 下菅生B式並行・黄鳥式後葉, 4層 : 縄文早期水台式並行・黄鳥式中葉段階, 4層下部 : 縄文早期稲荷山式並行・黄鳥式前葉 / 陽弓式並行・無紋土器, 6層 : 2群・縄文草創期無紋土器, 7～9層 : 縄文草創期上黒岩式・隆起線文土器と推移する。これらの土器のうち?マークを付けた中世や古墳時代の土師器と弥生前期の土器は表面採集遺物であるが [長井 2006], 確実な層位は不明ながらも落ちつくべき蓋然性の強い層位に含めた。以上, 列記した土器は考古学上の細別時期を示しており, とりもなおさず上黒岩岩陰の岩陰を利用した時期を示している。さらにいえば断続的な岩陰利用を示すにとどまらず, 縄文時代と岩陰利用の背景が全く異なると推定される弥生時代・古墳時代や中世段階の利用を示している。

## ②……………上黒岩岩陰出土遺物の層位的変化

ここでは, 上黒岩岩陰遺跡の4層 (縄文時代早期)・6層 (縄文時代草創期)・7層 (縄文時代草創期)・8層 (縄文時代草創期)・9層 (縄文時代草創期) の文化層出土遺物分析を主に行い, 比較検討の必要に応じて他文化層・他遺跡についても言及する。なお縄文時代草創期の9層は幾つかの地点で細分されているが, 土器や石器の特徴に大きな違いはないので, 一括して観察する。石器・石材等の数量については報告書記載の数量を参考とし [春成・小林編 2009], サヌカイトや黒曜石など, 愛媛県・高知県内で産出しない石材については遠隔地の石材であるとして論を進める。遠隔地石材の蛍光X線分析は行っていないが, その特徴から産地・地域が想定されるものは「推定姫島産黒曜石」・「推定香川県産サヌカイト」と記述している。また採集地点は不明ながら久万高原地域に通常点在する石が石器石材に用いられていた場合は「近隣産石材」として記載した。

### ①石器の組成と石材

**上黒岩9層** 狩猟に際しての狩猟具に弓矢 (石鏃), 投槍 (有茎尖頭器), 槍 (槍先形尖頭器) がある。その内訳は石鏃とその未成品2点, 有茎尖頭器とその未成品が80点 (未成品23点), 槍先尖頭器とその未成品が9点 (未成品4点) であり, 飛道具ともいわれる有茎尖頭器が圧倒的に多い。槍先尖頭器とその未成品は9点である (表1)。狩猟具に占める槍先形尖頭器の量は僅かであるが,

表1 上黒岩岩陰遺跡出土石器類の組成と石材

9 層	遠隔地石材				近隣石材				計	
	推定金山産 S n	その他 S n	無斑晶ガラス質安山岩	計	赤色硅質岩	無斑晶質安山岩	チャート	その他		
剥片石器及び関連遺物	石鏃			0				1	1	
	石鏃未成品			0			1	1	2	
	有茎尖頭器	5	4	1	10	19	5	12	11	47
	有茎尖頭器未	1	2		3	7	9	2	2	20
	槍先尖頭器	1	2	1	4	1				1
	槍先尖頭器未				0	1	1		2	4
	搔器	1			1	1	1		5	7
	削器	1	1		2	3	5		2	10
	楔形石器				0	1		1		2
	R F				0				1	1
	石鏑	2	3		5	5	38	2	15	60
	石鏑未成品		2		2	3	8		4	15
	石斧		1		1					0
	磨製石斧				0				1	1
石核		1		1	4	8	1	9	22	
計	11	16	2	29	45	75	19	54	193	
大型石器類	9 層	砂岩	輝石安山岩	頁岩		流紋岩	無斑晶質安山岩	綠色片岩	その他	
	敲石	1	2					4	3	10
	礫器・砥石						1	1		2
	凹・敲石	1						1		2
	有溝研磨器	2								2
	礫器・石核								1	1
計	4	2	0		0	1	6	4	17	
剥片石器及び関連遺物	7 層	遠隔地石材				近隣石材				
		推定金山産 S n	その他 S n	無斑晶ガラス質安山岩	計	赤色硅質岩	無斑晶質安山岩	チャート	その他	計
	石鏃				0			1	1	2
	有茎尖頭器		1		1	4		2	2	8
	有茎尖頭器未				0	4	2	1	2	9
	槍先尖頭器				0		1			1
	槍先尖頭器未				0			1		1
	搔器				0	2			3	5
	削器	1			1	1	1			2
	R F				0	1	1		2	4
	石鏑		1		1		7		2	9
	石鏑未成品				0		1		1	2
	石核				0	1			2	3
	計	1	2	0	3	13	13	5	15	46
大型石器類	7 層	砂岩	輝石安山岩	頁岩		流紋岩	無斑晶質安山岩	綠色片岩	その他	
	敲石								1	1
	礫器								3	3
	計	0	0	0		0	0	0	4	4
剥片石器及び関連遺物	6 層	遠隔地石材				近隣石材				
		推定金山産 S n	その他 S n	無斑晶ガラス質安山岩	計	赤色硅質岩	無斑晶質安山岩	チャート	その他	計
	石鏃	4	2		6	2	7	1		10
	石鏃未成品		1		1					0
	有茎尖頭器				0		1		1	2
	有茎尖頭器未				0	1	1			2
	槍先尖頭器				0	1				1
	搔器				0	1	1		2	4
	削器	1			1		1			1
	楔形石器				0	1				1
	石鏑				0		3		1	4
	石鏑未成品				0		3		2	5
	計	5	3	0	8	6	17	1	6	30
	大型石器類	6 層	砂岩	輝石安山岩	頁岩		流紋岩	無斑晶質安山岩	綠色片岩	その他
敲石								5	2	7
礫器・砥石								1	1	1
凹・磨石								2	1	3
凹・敲石								4		4
凹石								6		6
凹・磨・敲								2		2
台石								1		1
台石・敲石								3	2	5
台石・敲石・磨石								1		1
砥石								1	1	
計	0	0	0		0	0	24	7	31	
剥片石器類	4 層	遠隔地石材				近隣石材				
		推定金山産 S n	その他 S n	無斑晶ガラス質安山岩	計	赤色硅質岩	無斑晶質安山岩	チャート	その他	計
	石鏃	1	5	2	8	8	2		7	17
	石鏃未成品		1	1	2	1				1
	削器	1			1					0
楔形石器	1			1	1				1	
計	3	6	3	12	10	2	0	7	19	
大型石器	4 層	砂岩	輝石安山岩	頁岩		流紋岩	無斑晶質安山岩	綠色片岩	その他	
	敲石							1	1	2
計	0	0	0		0	0	1	1	2	

縄文時代を通じて微量ながら使われることから、マタギが用いる熊槍のような機能をもった補助的な道具として位置づけられていたのだろう。石鏃は矢柄の先端に先刃として装着されるものであることから弓矢猟の存在を示すもので、縄文時代草創期の隆起線文土器段階前半に行われるようになった狩猟法<sup>(1)</sup>である。ところが隆起文土器段階における石鏃の出土数は全国的にみても多くなく、上黒岩岩陰9層の事例も同様である。したがって上黒岩9層の頃の人々が弓矢猟の技術を保持していたことが窺えるものの、石鏃の数量から実際の狩猟時に基本装備としていなかったと推定する。

上黒岩9層の狩猟具を除く剥片石器の内訳は搔器8点、削器12点、楔形石器2点、石篋とその未成品82点、石斧類2点（磨製・打製）である。このうち搔器と削器は切削具であるが、とりわけ搔器は皮なめし具であるとか、脂の搔きとりに用いられると使用方法が推定されてきた器具である。注目されるのは、石篋とその未成品が82点も出土している点である。石篋は東北日本の縄文時代を通じて見られる石器で、削る・搔き取りなどの用途など、搔器と同様な使い方が推定されており、その形は打製石斧の小型例に近い。上黒岩の石篋も下端付近を半円形に入念な調整を加えて刃部としており、道具として利用度の高い道具であっただけでなく、大半が中央部分で破損していることから消耗率や利用度の高い道具であったことが窺える。

以上述べてきた剥片石器類や関連する石核の石材について、総数222点中に占める内訳をみると遠隔地の石材が13%、近隣の石材が87%であり、近隣の石材に強く依拠したことが分かる（表1）。

上黒岩9層の大型石器類の内訳は敲石10点、礫器・砥石2点、凹石・敲石2点、有溝砥石・矢柄研磨器2点、礫器・石核1点で、石器組成全体のなかで格別多いということはない。敲石の中には石器製作用・剥片剥離用と推定される例も若干含んでいる。また縄文時代に特徴的な大型石器として知られる凹石が9層に存在したことが注意される。これら大型石器の石材には全て近隣産の石材を用いており、とりわけ緑色片岩系統の石が35.2%（6点）もある。大型石器の石材として緑色片岩系統の石を用いるのは後の6層になって増えるが、9層においても遺跡の近くを流れる久万川河川敷に最も多い緑色片岩を利用したと考えるのが自然であろう（表1）。

**上黒岩8層** 出土遺物の多くは4・5次調査時のA区・B区で見つかっており、完掘されなかったことと、次に述べる7層と同様に他調査区の9層の細分層位に相当する可能性もあり、遺物は極めて少ない。内訳は石鏃3点、槍先形尖頭器1点、石篋とその未成品2点である。

**上黒岩7層** 出土遺物のほとんどは4・5次調査時のA区・A拡張区で見つかっており、調査日記には層相がC・D区9層に酷似すると記されていた〔春成・小林編2009〕。この7層から出土した土器や石器類の特徴はC・D区9層例と大きく変わる特徴はない。狩猟具の内訳は石鏃2点、有茎尖頭器とその未成品が18点（未成品9点）、槍先尖頭器が1点で、投槍（有茎尖頭器）を狩猟具の主体としている。石鏃は9・8層と同様、狩猟具の主体ではないが確実に共伴している。加工具・工具などその他の剥片石器の内訳は搔器・削器が8点、加工痕ある剥片が4点、石篋とその未成品が11点である。石篋も9・8層と同様に数量的に安定した状況で装備されており、隆起線文土器段階における狩猟具以外の主要な道具であったことが窺える（表1）。

7層の剥片石器及び関連する石核の総数49点中に占める石材の内訳は、遠隔地の石材が6%（推定金山サヌカイト産1点、サヌカイト2点）、近隣の石材が94%であり、9層同様に近隣の石材に強く依存したことが分かる。また有茎尖頭器とその未成品については赤色硅質岩が多く、石篋とそ

の未成品には無斑晶質安山岩が多いことも9層の場合と共通している。

大型石器は輝緑岩を用いた礫器1点と細粒砂岩を用いた敲石3点からなり、剥片石器と同様に数量が少ない。これは実質的な7層の調査範囲（A区・A拡張区）が小面積であることと、7層と9層の層相が良く似たことに起因する層の同定に関連した数量を示しているのかもしれない。

**上黒岩6層** 出土した狩猟具には石鏃16点と有茎尖頭器とその未成品4点、槍先形尖頭器1点がある。石鏃は二等辺三角形の平基式と浅い抉りを有する例、長幅が二対一で両基部が外側へ僅かに突出する例がある。このように狩猟具である石鏃が6層の頃には増えており、弓矢猟が狩猟の中心となっている。この点は鈴木道之助がすでに述べているとおりである[鈴木1972:20]。槍先形尖頭器は縄文時代早期にも少量ながら用いられることが知られているので、6層の無文土器段階に存在しても不思議ではない。有茎尖頭器については幅広い茎部幅と短い茎部長という特徴から7層～9層の例と共通する。6層には下位層から遊離したと考えられている隆起線文土器も少量出土しており、有茎尖頭器はこれに関連するものであろう。切削具については搔器4点・削器2点、また割裂用と考えられる楔形石器1点が出土しているが、狩猟具以外の剥片石器の量が少ない。この点は発掘資料の再点検が必要な部分かもしれないが、出土層位の分かる剥片石器類が少なく大勢に変化はないと推定する。6層の剥片石器類の石材については近隣産の石材を用いた例が多いが、石鏃を中心に剥片石器類に占める推定遠隔地産石材の割合は21%で、サヌカイトなどの推定遠隔地産石材利用の活発化が窺える（表1）。

上黒岩6層の生活実態を窺う上で最も注意されることは台石・敲石・磨石・凹石・砥石・礫器などの大型石器が33点も出土している点にある。石器製作用の敲石と推定される例も少量存在するが、そのほとんどが台石・敲石・磨石・凹石・砥石・礫器などの特徴を幾つか有している。これらは細長い棒状礫や楕円形礫を用い、長さや直径が10cmを超える例が大半である。その73%は緑色片岩系の石を用いているが、この種の石を用いた敲石についてはチャート、無斑晶質安山岩などの剥片石器用の硬質石材を打ち割ったりした例ではないと推定する。遺跡前の久万川で行った実験では、緑色片岩系の石は硬度が低く節理が多いため、剥片剥離のために硬いチャートや無斑晶質安山岩を敲打しても割れにくい特徴がある。したがって緑色片岩系の石を用いた大型石器類のうち、敲石としての属性をもつ例であっても剥片剥離用の敲石ではないと考える（表1）。

これらの大型石器に見られる使用痕跡には著しい摩滅・凹部・擦痕がある。摩滅は台石にみられ、貝類・骨など均質で硬いものを擦った場合に生じ、擦痕は石斧など部分的に凸凹したものを擦る場合に生じる特徴がある。また凹部は堅果類や貝類を割る際に生じることが台湾の民族事例にある[宋1958, 米沢1986・1996]。とりわけ上黒岩の凹石にみられる細長い凹部の断面形状は楔状を示す例が多く、深さが5mmに達する例もあり、数シーズンにわたっての再利用も推定される。これらのことから緑色片岩を主要石材とする大型石器類は石器製作に伴う打割用と推定するより、骨・角・堅果を対象とした打割や擦り・磨きなどに係る作業を集中的に行ったことを示すと考える。

**上黒岩4層** この層から出土した石器類は狩猟による消耗度の高い石鏃とその未成品が28点と最も多い。出土層位不明となっている石鏃についてもその形から多くの例が4層に由来する可能性を示している。その他、工具として楔形石器2点、切削具である削器1点がある。これら剥片石器石材の内訳は推定遠隔地産石材が38.7%（12点）、近隣の石材が61.3%（19点）である。漁猟具につ

いては石錘が7点（近隣の緑色岩）ある。調理加工具としての可能性を有する敲石・磨石1点（緑色岩）、石器製作用の敲石が1点（輝石安山岩）からなる。これらについては整理時における若干の抽出漏れは想定できるが、消耗度の高い石鏃を除くと石器類は多くない。

**上黒岩3層** この層は縄文時代前期の包含層とされてきたが、前期の土器片数は極めて少ない。これに関連するのか3層では明確に2次加工のある石器が少なく、生活感の希薄な層である。その内訳は狩猟による消耗度の高い石鏃とその未成品が18点と最も多く、その他、工具として石錐1点、楔形石器1点、切削具である削器1点、搔器1点である。これらの総数23点中に占める石材の内訳は、推定遠隔地産の石材が43.5%（推定金山産サヌカイト5点、サヌカイト2点、推定姫島産黒曜石3点）、近隣の石材が56.4%であり、遠隔地石材が多い。

このほか漁猟具としては近隣の緑色片岩を用いた石錘が1点、大型の加工具としては緑色片岩の敲石・凹石が1点である。本層においても遺物量が極めて少ないため整理段階における若干の遺物抽出洩れが想定できるものの、もともと遺物量が少なく人の生活痕跡が極めて希薄であったようである〔江坂・岡本・西田1967〕。その理由の1つとして推定できるのは「上黒岩岩陰」と称されているものの、3層の段階では岩陰の庇がほとんど埋没し、垂直に近い岩壁になっていることがある。おそらく天然の住居としての屋根の機能が低下し、岩陰に居住する意義も低下したのであろう。

以上、上黒岩岩陰における各層の様相を観察してきた。整理すると縄文時代草創期段階のうち9層～7層までは石鏃や槍先形尖頭器が極少量で、狩猟具の主体は槍（有茎尖頭器）にある。加工具・工具は少量であるが、石篋については多く必要とされたことが判る。6層の石篋については下位層からの混入であると考えられる。6層になると、狩猟具では弓矢（石鏃）が主体となり、調理・加工用とも推定される緑色片岩系の石を用いた凹石・敲石・砥石などの複合大型石器を使った諸作業の比重も大きかったのであろう。また4層・3層の大型石器は6層ほどではないが一定量用いられている。4層・3層の狩猟具については6層と同様に石鏃が狩猟具の主体となっているし、その他の石器についてもトトロ石器・石匙・楔形石器・凹石・石錘など、縄文時代に通有な装備が認められる。これらの剥片石器の石材については遠隔地石材の利用が9層：13%、7層：6%、6層：21%、4層：38.7%、3層で43.5%と6層以降漸次比率が増加している（表1）。

## ②久万高原地域の石器・石材組成

上黒岩岩陰3・4層段階以降、久万高原一帯でどのような文化の変遷過程を経たのかは詳らかでないが、同じ久万高原地域内にある笛ヶ滝遺跡や山神遺跡の事例から推し量ってみたい。

笛ヶ滝遺跡は上黒岩岩陰から直線で北西へ7キロの地点にある同じ久万高原の開地遺跡で、極少量の高山寺式系の土器のほか、縄文時代後期中葉～後期末の土器と晩期末の黒川式系土器が多量に出土している〔潮見・十亀1983〕。出土した石器類の正確な時期は詳らかになしえないが、土器の数量から大半の石器は縄文時代後期中葉から晩期末の土器群に伴うと推定することは可能であろう。出土した剥片石器類には石鏃71点、横刃形石器約5点、石匙2点、大型石器には扁平打製石斧、九州系の十字形石器、磨製石斧がある。大型石器のなかに台石・磨石・凹石などの有無に関する記載はない。剥片石器のうち石鏃の石材内容が示されており、遠隔地の石材が85.9%（サヌカイト60点、推定姫島産黒曜石1点）、近隣産石材14.1%（赤色硅質岩を含むチャートなど10点）である。

また採集された石鏃 358 点のうち推定遠隔地産石材が 83.5% (サヌカイト 295 点, 推定姫島産黒曜石 4 点), 近隣産石材が 16.5% (赤色硅質岩を含むチャート 59 点) である。大型石器には扁平打製石斧, 十字形石器, 磨製石斧などの石材には近隣の緑色片岩系の石を用いているようであるが, 小型剥片石器の中心的遺物である石鏃の石材は推定遠隔地産のサヌカイトが圧倒的に多く用いられる。

この他, 同じ久万高原町の山神遺跡Ⅲ区でも笛ヶ滝遺跡と同様に縄文時代後期から晩期頃の遺物を主体とする遺跡が見つまっているが, 剥片石器の石材組成は推定遠隔地産のサヌカイト・黒曜石が 97% と圧倒的に多い (サヌカイト 66 点・黒曜石 3 点)。以上, 上黒岩岩陰 3 層以降の動向を観察すると久万高原地域の遺跡では推定遠隔地産のサヌカイトが多用されるのは変わらず, 更に推定姫島産黒曜石も少量ながら受容されつづけている。

### ③久万高原外域の石器・石材組成

旧石器時代遺跡の四国南部高知県西部の和口遺跡では, 瀬戸内技法関連の遺物を中心に 409 点が表面採集されている [木村 2003]。それらに用いた石材の 99.76% (408 点) が近隣で入手できる頁岩で, 残り 1 点の赤色硅質岩もその可能性が高い。高知平野中央部に近い奥谷南遺跡では旧石器時代後期ナイフ形石器文化期の遺物が 56 点, 旧石器時代終末から縄文時代初頭の細石刃核が 88 点出土しており, そのほとんどが, 岩陰周辺でも採取されるチャートを用いている。四国の北部にあたる愛媛県宝ヶ口Ⅰ遺跡では出土した石器類が 39 個体に区分され, 推定遠隔地産石材と推定されるサヌカイトは 15.4% で, その他は推定近隣産とする個体が 84.6% (うち頁岩 59%) を占めている [多田 1994]。宝ヶ口Ⅰ遺跡でサヌカイトが多いのは地理的にサヌカイト産地の香川県方面に近いことと香川県に所在するサヌカイト原産地方向へ向かうルートに急峻な自然障壁がなかったこともあるのだろう。それでも後の縄文時代と比べると圧倒的に近隣産の石材が多い。四国北東部の香川県周辺の遺跡では近隣の国府台・金山等で産出するサヌカイト, ガラス質安山岩を用いている。このように旧石器時代の石材利用の実態は近隣の散布地で石材を入手し, 遊動する過程でそれらが消耗することに比例するように移動先の石材が増えることに特徴がある。

上黒岩岩陰の下流域, 仁淀川の支流で柳瀬川の尾川川を臨む不動が岩屋洞穴遺跡からは縄文時代草創期の隆起線文土器や縄文時代早期の無紋土器及び押型文土器に伴う有茎尖頭器, 石鏃, 石錐, RF (加工痕ある剥片), 原石, 局部磨製石斧などが 80 点出土している。これらの石器類に用いた石材の内訳は, 遠隔地石材 6.25% (サヌカイト 3 点, 推定姫島産黒曜石 2 点), 近隣石材 88.75% (硬砂岩 1 点, 安山岩 1 点, チャート 69 点), 不明 3 点で, 圧倒的に近隣石材が多い。その他, 膨大な剥片・石核類についてもほとんどがチャートである。推定姫島産黒曜石は大分県の遺跡で稲荷山式土器・早水台式土器段階には用いられないか, 極めて稀な利用であって [綿貫 2009], 不動が岩屋の姫島産黒曜石は早期後半以降のものと推定される。不動が岩屋の押型文土器は黄島式土器でも前葉の例と推定されるので<sup>(2)</sup>, 隆起線文土器段階から押型文土器の段階へ時期を違えても剥片石器の石材としてチャートに依拠していたことが窺える。その理由として近隣の地質構造線に多くのチャート岩塊が含まれことが挙げられる。

飼古屋岩陰遺跡は高知平野東北部にある遺跡であり, ここで出土した土器は縄文早期前葉の黄島式土器前葉 (稲荷山式土器並行) が主体で, 極少量の神宮寺式土器, 高山寺式土器, 縄文中期の船

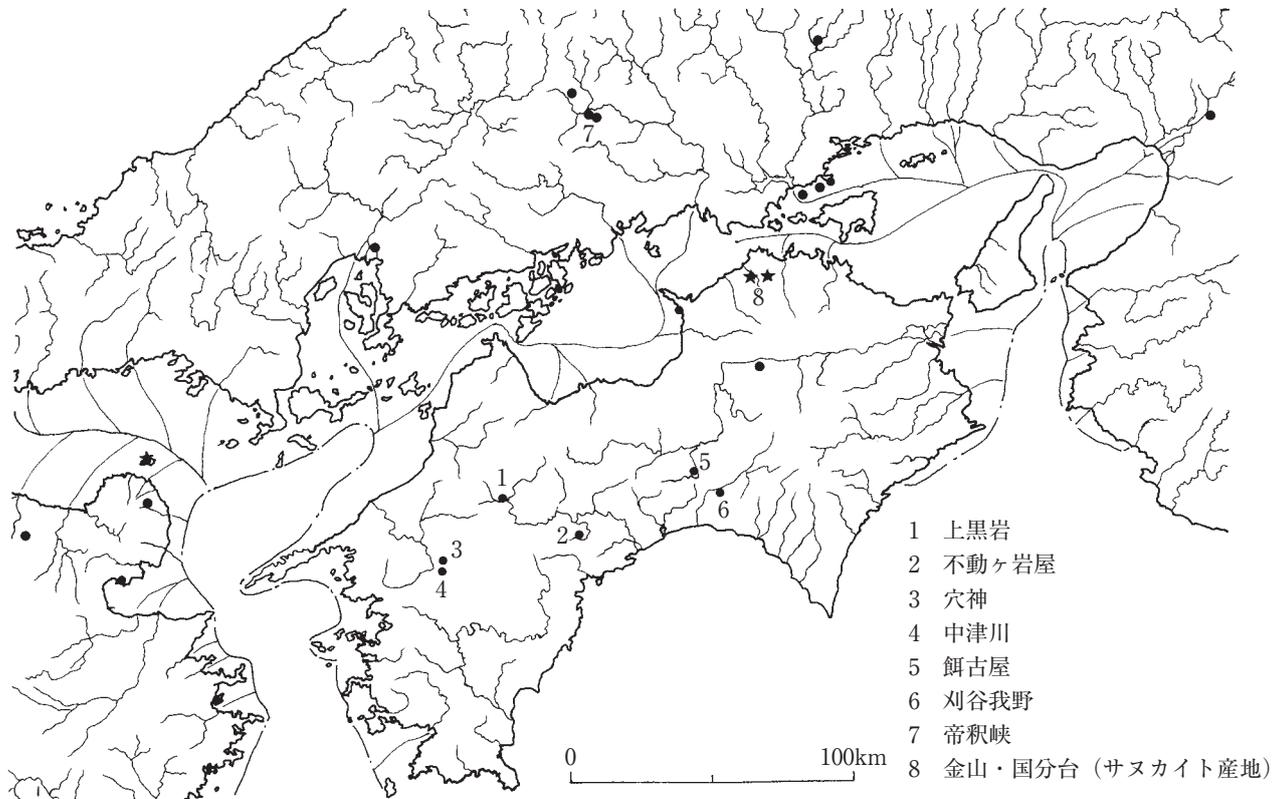


図1 縄文時代草創期・早期の遺跡分布 ※海岸線は-50mのライン

元式土器，縄文後期の彦崎KⅡ式土器からなる〔森田1983〕。石器の構成は石鏃327点，削器13点，石核・剥片・チップ（数量不明）である。敲石・磨石等の大型石器はなかったようである。うち数量の分かる石器の石材は遠隔地産70.6%（推定姫島産黒曜石2点，推定香川県産サヌカイト238点），近隣産29.4%（チャート98点，粘板岩・流紋岩各1点）であり，推定姫島産黒曜石の供給地大分県の事例では少なくとも高山寺式土器の頃からの利用であることから，餌古屋岩陰の神宮寺式土器や主体をなす縄文早期前葉の黄島式土器前葉（稻荷山式土器並行）の頃は剥片石器の石材に推定姫島産黒曜石は想定できず，大部分がサヌカイトやチャートを用いていたと考える。この他，チップや剥片も多量に出ているようで，前者はサヌカイトが多く，後者はチャートが多い。このことから遠隔地産のサヌカイトを石材とする石鏃は未成品や成品で持ち込まれ，細部調整，メンテナンス程度が行われたと推定される。

刈谷我野遺跡も高知平野東北部北辺の山間にあり，餌古屋岩陰遺跡に近い遺跡である。この遺跡の調査区は830㎡であるが，遺跡の範囲は約2,500㎡以上と推定される大きな遺跡である。ここからは縄文早期の多量の無文土器と押型文土器が出土している。調査・報告担当の松本安紀彦は押型文土器の時期を「黄島式土器」及び「黄島式土器」以前の出現期押型文土器からなるというが〔松本2005, 2007〕，柵状文のある中葉の黄島式土器は極少量のようである。無文土器は東九州初期押型文土器直前の陽弓式土器に近縁な土器で，このあたりの出現期押型文土器に前後する頃のものだ

ろう。土器からみると刈谷我野遺跡の方が飼古屋遺跡に比べてやや古いか、ほぼ同一時期の土器を含んでいるという理解になろうか。松本も刈谷我野遺跡の土器について若干の時期差を指摘しているが、出土した石器をそれぞれの時期に区分するのは困難である。しかし石器と遺構の状況が極めて特徴的である。すなわち、剥片石器の数量が69点（石鏃56点、尖頭器3点、楔形石器4点、石匙1点、削器3点、加工痕ある剥片2点）に対し、使い込まれた大型の礫石器が132点（磨石・敲石、台石、凹石）も出ている。また剥片石器の石材は推定遠隔地産87%（推定香川県産サヌカイト60点）、推定近隣産13%（チャート7点、砂岩・水晶各1点）である。推定遠隔地産のサヌカイトにはチップだけでなく剥片類も含み、原石・石核がないので少なくとも剥片の状態ですヌカイトを入手したことが判る。この点は成品の他に、多量のチップがみられた飼古屋岩陰遺跡と異なる。遺構については土坑が17基検出され、報告者の松本は大型礫石器の出土量と併せて定住集落の存在を考えている〔松本2005〕。

なお、松山平野などの瀬戸内側や宇和海側の南予地域では縄文時代草創期・早期の良好な遺跡が少ない。一方、南予地域・高知県西部地域ではチャートが豊富に産出することもあり、近隣産のチャートや珪質頁岩を剥片石器の主要石材とする遺跡が多い。この地域以外においては概ね縄文時代早期以降、サヌカイトや推定姫島産黒曜石などが含まれ〔兵頭2009〕、地域的に数量の多少はあるものの推定遠隔地産石材の増加傾向が窺える。

#### ④ 小結

縄文草創期隆起線文土器段階と、刈谷我野遺跡などの縄文早期の無紋土器・早期前葉の黄島式土器段階の間にくるのが上黒岩岩陰6層の無文土器段階で、この6層になると数量的には僅かであるが、割合的に推定遠隔地石材（サヌカイト）が急増している。その後、飼古屋岩陰遺跡や刈谷我野遺跡などの無文土器、前葉の黄島式土器段階、早期押型文土器段階の上黒岩岩陰<sup>(3)</sup>4層、笛ヶ滝遺跡（縄文時代後期中葉～晩期）と続くが、サヌカイトを中心とした推定遠隔地石材が増加傾向にあることに加え、推定姫島産黒曜石も僅かながら得ている。このように上黒岩岩陰9層などの隆起線文土器段階では推定遠隔地産石材が極少量であったのに対し、少なくとも上黒岩岩陰6層を画期として遠隔地石材の交換・交易システムが萌芽的にせよ成立・発達していったことが窺える。したがって遠隔地石材の交換・交易システムの成立・発達が定住と深く関連するものであれば6層以降は定住あるいは定住傾向の高まりという背景・時期のなかで利用された短期キャンプであると評価できる。他方、9層～7層までの隆起線文土器段階は大型石器を僅かながら含むことと、推定遠隔地産石材や遊動に不都合な土器を含むことから典型的な旧石器時代の遊動生活は窺えない。こうした状況から通年居住（定住）でないとでも数ヶ月単位・季節単位の狩猟を中心とした半定住的居住の拠点集落に関連する短期キャンプが推測できる。以上のような異なる居住形態が想定されるものの、上黒岩岩陰自体は定住集落・拠点集落とは異なったキャンプ地という点では共通する。

また縄文時代早期の陽弓式並行の無文土器段階～黄島式土器古相段階に位置づけられる遺跡のうち、明確に性格の異なる定住的な刈谷我野遺跡と狩猟キャンプ的な様相の強い飼古屋岩陰遺跡に、遺跡を区分できた。おそらく刈谷我野と飼古屋の関係は、前者が少なくともサヌカイトの剥片を入手し、後者は成品もしくは半成品のみを持ち込んでいることから、前者のような遺跡から後者への

移動パターンが窺える。

### ③……………上黒岩岩陰遺跡出土の自然遺物

上黒岩岩陰からは石器類とともに多くの獣骨や貝類などの自然遺物が各層から出土しており [江坂1962, 姉崎・吉永・佐藤・西本・2009], これらについて石器組成との関係から生業活動を観察してみたい。

3～9層までの各層で量の多少はあるもの獣骨が出土している。動物骨類は9層～3層まで共通して出ているが, 7・5・3層で著しく少ない。7層については岩陰奥部のほとんどA区のみが主要な調査区であったという狭小性と, 完掘できなかったことから数量が少ないと考える。5層については元々礫層であることから文化層と考えられず, 石器などの特徴から獣骨類は4・6層からの混入と推定する。3層は, 元々土器・石器などが少ないことから岩陰利用度が少なかったことと関係があるのだろう。

上黒岩岩陰の居住者たちが得た動物類は, 残された骨などからシカ, イノシシ, カモシカ, クマ, オオカミ, サル, タヌキ, キツネ, アナグマ, ヤマネコ, テン, イタチ, ムササビ, カワウソ, ウサギ, コウモリ, モグラ, ネズミ類が各層で出土し (表2), 貝類には淡水系のイシガイ6点 (3・4層)・カワニナ (9層以上で多数), 汽水生のヤマトシジミ43点 (4層)・海水生のオキシジミ43点 (3・4層)・ハマグリ16点 (3～5層)・ハイガイ5点 (3・4層)・マツバガイ1点 (3層) が出土している [姉崎・吉永・佐藤・西本・2009]。これに4層で装身具として持ち込まれたマガキガイ6点・イモガイ2点 (サヤガタイモ)・タカラガイ4点 (ハナマルユキ, カモンダカラ, メダカラ) を加えることができる [春成2009]。金子浩昌の報告は姉崎智子らの報告から重複する種を除くと魚類としてウナギとマサバ (3層), 鳥類としてキジ (1層～4層・9層: 黄褐色土層), 哺乳類としてイヌ (2層)・クマ (8層)・オオカミ (2層), 甲殻類としてモクズガニ (4層) が出土している [金子1967]。特に暦年較正年代で15,000～14,400 Cal BP [Beta-201260の較正, 小林他2006]と

表2 上黒岩岩陰遺跡出土の獣骨数 (最小個体数) のグラフ

地層	シカ	イノシシ	カモシカ	クマ	オオカミ	イヌ	サル	タヌキ	キツネ	アナグマ	ヤマネコ	テン	イタチ	ムササビ	カワウソ	ウサギ	コウモリ	モグラ	ネズミ類
	5 10	5点	5			5	5	5								5			
3層	■	■	■		■		■	■	■			■	■			■			■
4層	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■	■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■			■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■
5層	■■■■	■■■■	■■■■	■				■■		■									■
6層	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■	■		■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■				■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■		■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■			■
7層	■	■					■	■											
8層	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■	■	■	■■■■■■■■■■	■		■	■	■	■		■	■		■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■
9層	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■	■	■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■			■■■■■■■■■■	■			■				

※報告書P360, 341及び金子1967から作成

測定された9層の隆起線文土器段階において縄文時代的な動物相が出揃っていることが興味深い。更に各層で共通して多いのはシカ・イノシシで、カモシカもやや多い。一方、大きな違いは縄文時代草創期の9層・8層・6層でサル<sup>(4)</sup>の捕獲数が多いことと、縄文時代早期押型文土器段階の4層で狸とウサギの捕獲数が目立っている。これらの事例を除くとオオカミ、タヌキ以下の中・小型獣の捕獲量は少ない。総捕獲量という点では4層がやや多いが、突出した捕獲量というほどではない(表2)。なお狩猟時に絶大な効果があるイヌも、8層・9層の隆起線文土器段階から運用されていたことが分かった。イヌ利用の狩猟がこれまで最古とされてきた夏島式土器段階よりさかのぼることになる。

植物質食料に関する直接的な遺物として上黒岩6層ではオニグルミ、上黒岩4層でもヒメグルミとエノキの核がみつまっている[橋本・矢作2009:409]。また8層からは間接的には亜寒帯針葉樹林の植生であるヒメコマツ(ゴヨウマツ)の炭化材もみつまっている[江坂1962, 橋本・矢作2009:409]。ヒメコマツはチョウセンゴヨウの仲間であり、その実は食べることができるとされており[鈴木1988:21]、栄養価も高いことから食料とした可能性がある(100gあたり634カロリー)。

これまで自然遺物を観察してきたが、出土した石器との関係で言えば興味深い点が挙げられる。上黒岩岩陰遺跡の報告書では獣骨類の多くが各層で割られている。このことは、石鏃等を用いて獲った獣の骨を敲石・楔形石器で割られていたことに対応すると推定される。とりわけ第2/第5指骨が関節面に対して縦に割られていることは楔形石器との関係が推定される。

周辺を含めた草創期～早期の洞穴遺跡などの状況を併せ、出土自然遺物と石器組成との検討を重ねていくことで、生業に関する考察を深めていくことができると考えている。

#### ④……………上黒岩岩陰に居住した人々の領域資源

上述したように上黒岩岩陰に滞在した人々の領域は、地形的に周辺地域との隔絶性が高いことから現在の久万高原町を主要な領域(主要生活圏)と推定するが、この久万高原町の面積は583.66km<sup>2</sup>という広大な面積をもっている<sup>(5)</sup>。そこで上黒岩の岩陰をキャンプ地として居住した人々の主要生活圏を半径5kmと10km、部分的に15kmと仮定し、生活上の資源や地理的な環境をみてみたい(図2)。この距離の設定は現生の狩猟民の行動圏に準じ、上黒岩岩陰と各種資源との距離を観察する目安とする。その際、通常居住地から遠くなるほど資源との関係が希薄になるという点を観察視点とする。

まず上黒岩遺跡のある地域が久万高原でどのような地勢・地理的環境にあるのか確認しておきたい。石鎚山の南麓を除き、北西部から北東部が約15km、西部・南部・東部は約10kmで久万高原地域の大半を占めるが、地形は北側・西側三坂峠・井内峠・白猪峠からなる分水嶺となる。この分水嶺の北側は急峻な下り坂となって松山方面へ続くが、南側は比較的比高差の少ない山や高原が広がり、南流する川に沿って平地が形成され、縄文時代の遺跡が多く見つかる地区である[長井2008:1]。南流する各支流が東流する久万川と合流する付近から再び比高差のある山・谷地形となる。上黒岩岩陰前の久万川を下流の川沿いに約2kmで面河川と合流する。丁度この合流点には御三戸嶽という白く切立った奇岩があり、ランドマークになったと推定される。

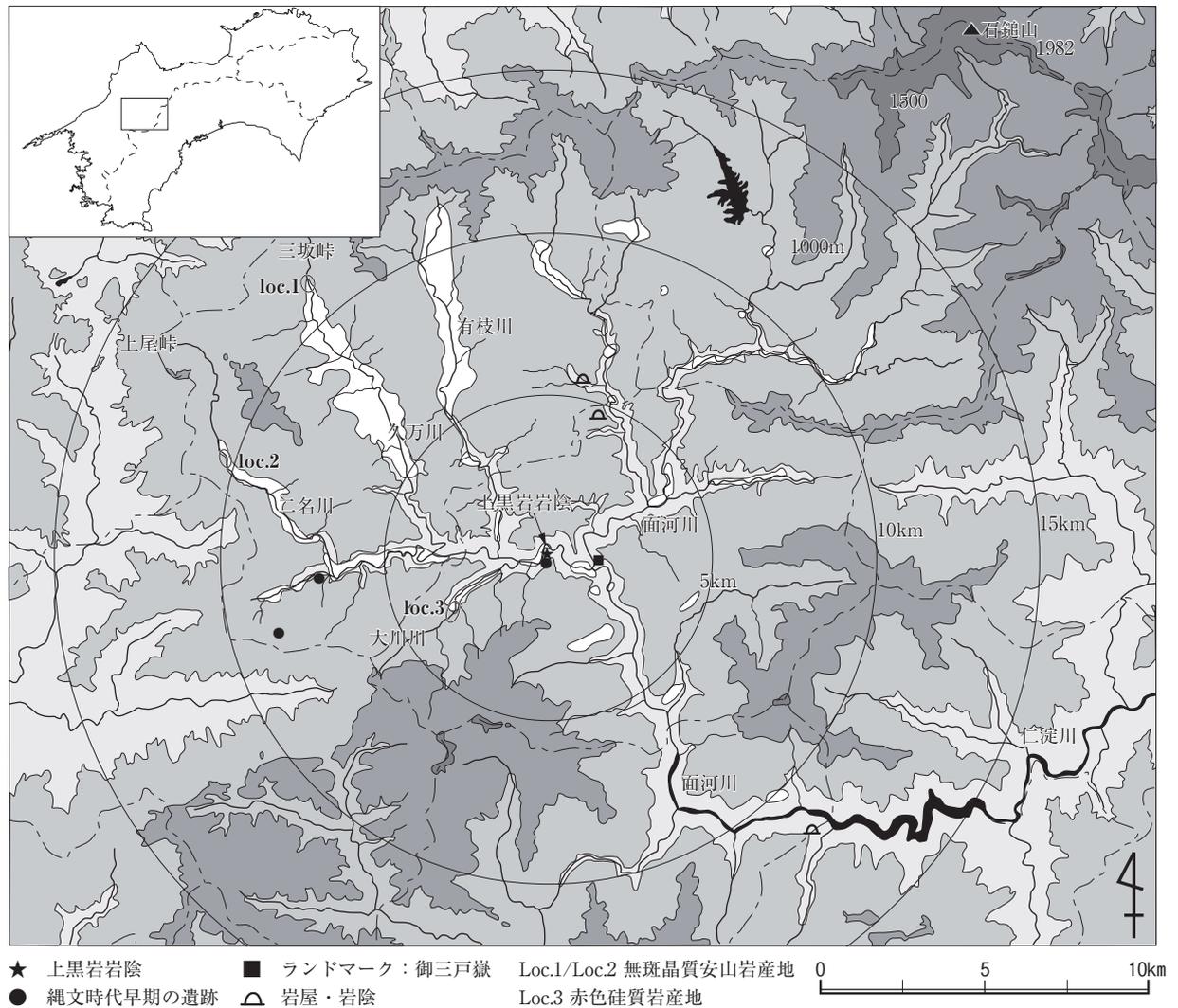


図2 久万高原地域の地形と岩陰・石材の分布

この地域を取巻く四国山地の分水嶺は標高1,982mの石鎚山を筆頭にして、1,000m級の峰が連なる。この地域の植生を見ると標高約1,000m以上で落葉広葉樹のミズナラ・ブナクラス植生、それ以下標高500mまでが常緑広葉樹のヤブツバキクラス域上部となる。上黒岩岩陰付近の標高は約400mなので、ヤブツバキクラス域上部とヤブツバキクラス域下部との境界付近の植生ということになる。上黒岩A区8層（隆起線文土器文化層）からはゴヨウマツの炭化材が出土しているので、9～8層の頃は亜寒帯針葉樹林帯、もしくは落葉広葉樹林帯上部との境界付近であったのだろう。更に上黒岩6層でオニグルミ、4層からヒメグルミなど落葉広葉樹の核が出ているので、草創期末から縄文時代早期頃は周囲に落葉広葉樹のミズナラ・ブナクラス植生が広がっていたのであろう。

石器の石材について上黒岩では主な石は無斑晶質安山岩・赤色硅質岩・緑色岩であった。この石材資源に関する橋本真紀夫・矢作健二の調査で無斑晶質安山岩の採取地が三坂峠に近い久万川最上流のLoc.1と二名川上流のLoc.2、赤色硅質岩は大川川のLoc.3での採取可能なことがわかった〔橋

本・矢作 2009 : 483]。上黒岩で出土した無斑晶質安山岩の石核には 1kg を超える例があり、推定復元をすると倍以上 (約 2kg) の大きさとなるだけでなく、製作された石器類の中には円礫面を有する初期剥片を素材としたものや大型の石筥・石斧が多い。このような特質を有する石材は通常遺跡から 1, 2km 以内に原石採取地が存在する。橋本や矢作が挙げた Loc.1 と Loc.2 は上黒岩まで約 13km, 14km の距離がある無斑晶質安山岩の一次露頭地で (図 1), 露頭と崩落した角礫からなるので Loc.1 と Loc.2 は主要石器石材の採取地としての可能性は低いといえよう。筆者も上黒岩岩陰の周辺の川原で石材の分布を調べたおり、無斑晶質安山岩 (角の取れた礫), 赤色硅質岩 (角礫), 緑色片岩 (楕円・円礫) の存在を確認している。したがって無斑晶質安山岩・緑色片岩については 10km 以上離れた地点の角礫を採取したと考えるよりは上黒岩岩陰の事例と同様な楕円・円礫を周辺で採取したと考えるほうが自然である。赤色硅質岩も上黒岩岩陰周辺の川原にも少量あるが、橋本・矢作が報告した Loc.3 では角礫が多く散布しており、上黒岩岩陰から 3.5km 程度の近い距離にあることを考えると、小型の剥片石器用石材に用いた赤色硅質岩の有力な産地と考える。

御三戸嶽から面河川上流方面へ遡ると岩陰・洞穴群の発達した岩屋 (岩屋寺) や古岩屋と石鏡山南麓方面へ向かい、合流点を下ると高知平野方面に向かう。上黒岩岩陰は久万川上流域と面河川上流・高知方面を繋ぐ回廊状の谷間に位置する巨岩下に位置しているが、他にも狩猟の際や、ビバーク時に上黒岩岩陰と同様に使いうると考えられる言わば不動産 (物的財産) としての洞穴・岩陰が点在している。とりわけ上黒岩岩陰の北方 5km 圏を挟んで古岩屋地区と岩屋寺地区、南東の面河川の支流にも岩屋地区があつて、それぞれ多くの岩陰・洞穴がある。更に、上黒岩岩陰南西 0.56km 地点には上黒岩第 2 岩陰遺跡 (岩屋岩陰)。とりわけ上黒岩第 2 岩陰遺跡は押型文土器が出土しており、石器などの特徴から上黒岩岩陰の居住者が利用した可能性の極めて高い遺跡である。

以上をまとめると、上黒岩岩陰からの出土品の多くは遺跡に近い久万高原内で調達可能であり、岩陰・洞穴の分布も生活する上で有利であったと考えられる。

## 結論

上黒岩岩陰に関するこれまでの観察から、上黒岩の岩陰は旧石器時代的な遊動社会的における利用ではなく、久万高原地域を領域とする半定住集落、定住集落などの拠点集落とは別に利用されていた。遺跡のなりたちは遊動、半定住<sup>(6)</sup>、定住という脈絡のなかで、想定することが多い。上黒岩岩陰のような狭小で底下の面積が幾ばくもない岩陰は、明らかに定住社会が成立していたと多くの研究者が認める時代・時期であっても定住集落・拠点集落とみなすことはありえない。考古学的成果や文化人類学的成果によると定住社会においては物流の広域化・交易の活発化を示すことが多い。このような視点から上黒岩岩陰の剥片石器石材を観察した結果、遅くとも上黒岩 6 層段階以降において遠隔地石材の増加が窺えていたが、その後、4 層：縄文時代早期、3 層：縄文時代前期と安定して遠隔地の石材を入手している。この遠隔地石材の利用・増加は、上黒岩と同じ久万高原地域の縄文時代後期～晩期を主体とする笛ヶ滝遺跡・山神遺跡でもみられるだけでなく、縄文時代早期から弥生時代前期頃までの西部及び南部四国地域の傾向でもある。したがって、おそくとも上黒岩 6 層段階には恒常的交換システムの成立が窺えるので定住指向・傾向の高まった集落が地域内に形成

されたと考える。

そうした石材組成が示す居住形態の変動のなかで、上黒岩岩陰の縄文時代草創期～前期にかけての岩陰利用は、季節的、あるいは必要に応じ時おり利用する遺跡であった。獣骨の出土量から上黒岩岩陰における季節的に限定される可能性の高いシカ猟とイノシシ猟が中心で、その他の季節を示す自然遺物類は稀少であるし、9層の石偶（線刻礫）にまつわる呪い、4層の人骨再葬は岩陰利用期間という点では長期性を示すものではない。炭素・窒素同位体分析の全国的傾向からすれば、海岸部の人間が季節的に利用したというより、久万高原地域に予想される半定住的拠点集落や定住集落の縄文人による冬季の狩猟を中心とした利用と、他の季節においても狩猟・漁労・呪い・再葬(4層)に関する作業を時々行なったのが岩陰利用の実態である。また狩猟に関して、上黒岩岩陰の遺物量や主体をなす狩猟具の特徴を考えると、滞在期間や生産性に差が想定されるが、獣骨からみた動物の最小個体数にさほど違いがない。これは狩猟具が投槍（有茎尖頭器）から弓矢へ変革しただけでなく、イヌを連れた狩猟編成で可能となったと考える。

春成秀爾は上黒岩岩陰の報告書の総括で、「筆者は、岡山県牛窓町に所在する押型文土器の時期の黒島貝塚を調査した経験をもっている。…中略…きわめて小規模の貝塚からは獣骨・魚骨の一片も見いだすことができなかった。その様相は、まさに北ヨーロッパの中石器時代文化を思わせた。確かに押型文土器の時期にも、九州には熊本県瀬田裏遺跡や大分県日出町早水台遺跡のような、大規模な遺跡も存在し、前者には大規模な配石遺構を伴っている。しかし、それらは例外的であって、本州・四国ではこの時期は、上黒岩岩陰の状況が示しているように、基本的に小規模なおそらく10人内外からなる小集団が広大な領域内で遊動生活をおこなっていたと考えるべきであろう。」と上黒岩岩陰の性格を総括した〔春成2009:544〕。春成が挙げた上黒岩岩陰の状況や、その他の遺跡に関する理解は基本的に正しい。しかし筆者はこう考える。本州・四国にも刈谷我野遺跡・奈良県大川遺跡等、春成の言う「例外的」な少数の大規模遺跡（半定住集落、定住集落）があるし、九州には多くの小規模遺跡も存在する。したがってこれまでも述べてきたように少数の半定住・定住集落には上黒岩岩陰や黒島貝塚のような狩猟キャンプ、採集キャンプ（小貝塚を含む）、埋葬・再葬地が多くあり、時節や必要に応じて利用したと考える。言い換えると少数の大規模遺跡と多数の小規模遺跡は相対性の関係にあり、その枠組みのなかで定住への比重を高めていったと考える。

【付記】 本稿の作成にあたって遠部 慎（徳島大学埋蔵文化財調査室）・鈴木忠司（古代学協会）・竹広文明（広島大学）・兵頭 勲（愛媛県教育委員会）・藤木 聡（宮崎県）・松本安紀彦（高知県埋蔵文化財センター）の各氏にご教示を受けた。記して感謝の意を表する。

#### 註

(1)——石鏃の出現については隆起線土器段階に先行する長者久保・神子柴段階に位置づけられる大平山元I遺跡での出土例が数点知られる。大平山元Iの例は上端が尖らないことと、基部と側縁の境界が鋭くなく半円形を呈する点から石鏃ではなく、拇指状搔器と考える。

(2)——中国・四国地方の黄島式土器は本来高山寺式土器以前の押型文土器を概ね総称したものであるが、近年、黄島式土器を早水台式土器と同じものに限定する意見がある（兵頭2008）。しかし黄島式の名祖となる黄島貝塚には口縁内面に柵状文を施した例は極めて少なく、柵状

文をもつ早水台式土器と並行するものとして「黄島式土器」を設定するのは極めて分かりにくいと考える。したがって「黄島式」を用いる場合、これまでと同様に高山寺式土器以前を総称するものとして用いるか（亀ヶ岡式と同様な意味で）、川原田式・稲荷山式・早水台式・下菅生B式以外の土器で黄島貝塚に存在するものに限定するべきだと考える。本稿では黄島式を暫定的に用いており、黄島式土器前葉（川原田式・稲荷山式並行）、黄島式土器中葉（早水台式並行）、黄島式土器後葉（下菅生B式並行）と記述している。

(3)——上黒岩岩陰4層から出土した土器をみると、押型文土器の出現期である川原田式土器や稲荷山式土器に相当する土器が中心となっており、かなりな部分が銅古屋岩陰や刈谷我野遺跡の土器と並行する。

(4)——上黒岩岩陰4層では小型獣が多く捕られているが、なかには弓矢による狩猟にはなじまない極めて敏捷な動きをするテン、イタチが含まれている。直接的な証

拠はないが、罾による捕獲を考えたところである。

(5)——久万高原地域は仁淀川流域の中でも最上流域の四国山地にあり、他流域との分水嶺の外側が険しい山岳・急勾配地形を呈する小世界である。この地域は急勾配な山岳・小盆地内の低丘陵・川が連続するという生態的環境にある。

久万高原地域を領域とする拠点集落からみれば上黒岩岩陰を1次キャンプとすると、上黒岩岩陰の南方約500mの尾根にある上黒岩第2岩陰遺跡は2次的な狩猟キャンプと考えておきたい。上黒岩第2岩陰からは縄文時代早期の押型文土器と極少量の大型石器と剥片石器が見つかり、筆者は上黒岩第2岩陰の遺物は上黒岩岩陰から持ち込まれたと推定した（綿貫2009:281）。

(6)——移動の動機を季節と考え、家族等の居住する集落が移動する場合。定住ではないため推定遠隔地産石材の入手率が著しく低い。

## 参考文献

- 姉崎智子・吉永亜紀子・佐藤孝雄・西本豊弘 2009「第3部 第6章 脊椎動物遺体」春成秀爾・小林謙一編『愛媛県上黒岩遺跡の研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』第154集、国立歴史民俗博物館、301-342
- 雨宮瑞生 1996「縄文定住狩猟採集民文化・社会の成熟」『古文化談叢』古文化研究会、149-162
- 雨宮瑞生・上東克彦・福永裕暁 1999「温帯森林の初期定住（補遺）—南九州縄文時代草創期中葉の越冬定住地・掃除山と越夏定住地・拵ノ原」『南九州縄文通信』No.13、南九州縄文研究会、7-23
- 池田次郎 1985「海と山の縄文人：形態の地域差と年代差」八幡一郎先生頌寿記念考古学論集編集委員会編『日本史の黎明—八幡一郎先生頌寿記念考古学論集—』六興出版、29-56
- 稲田孝司 1996「縄文文化の形成」『岩波講座 日本考古学』6変化と画期 株式会社岩波書店、65-118
- 江坂輝彌 1962.8「愛媛県上浮穴郡美川村上黒岩岩陰遺跡調査速報」『洞穴遺跡調査会会報』2、洞穴遺跡調査会、2-4
- 江坂輝彌・岡本健児・西田栄 1967「愛媛県上黒岩岩陰」『日本の洞穴遺跡』平凡社、224-236
- 遠部 慎 2009「第1次調査の成果」『犬島貝塚』六一書房、153-158
- 勝浦康守 1997「三谷遺跡—徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査—」徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会
- 金子浩昌 1967「洞穴遺跡出土の動物遺存体」『日本の洞穴遺跡』平凡社、424-451
- 木村剛朗 2003『南四国の後期旧石器文化研究』幡多埋文研
- 小林謙一・春成秀爾・今村峯雄・西本豊弘 2006「縄文時代草創期の炭素14年代測定」『日本考古学協会第72回総会研究発表要旨』日本考古学協会、69-72
- 佐々木高明 1991『日本の歴史①・日本史誕生』集英社、88
- 潮見 浩・十亀幸雄 1983「愛媛県笹ヶ滝遺跡」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』VI、広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、107-130
- 鈴木道之助 1972「縄文時代草創期初頭の狩猟活動」『考古学ジャーナル』No.76、ニュー・サイエンス社、10-20
- 鈴木忠司 1988「素描—日本先土器文化の食糧と生業」『朱雀—京都文化博物館研究紀要』第1集、財団法人京都文化財団、1~40
- 宋文薫 1958.3「凹石の用途」『季刊民俗学』第22巻 第1・2号、澁澤敬三先生還暦記念、誠文堂新光社、120-122
- 高野晋司 2000「平成3年度以降の調査」『遺跡保存方法の検討—水中遺跡—』文化庁
- 多田仁 1994「宝ヶ口I遺跡」『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅷ、財団法人愛媛県埋蔵文化財センター、46-130
- 戸沢充則 1986「縄文時代観の転換ということ」『月刊歴史手帳』4（14巻4号）名著出版、4-11

- 
- 戸沢充則 1995「縄文時代論のもう一つの視角」戸沢充則編『縄文人の時代』新泉社, 264-284
- 長井数秋 2006「上黒岩岩陰遺跡出土の古式土師器と弥生土器他」『ソーシャル・リサーチ』第31号, ソーシャル・リサーチ研究会, 愛媛・伊予西条, 1-14
- 長井数秋編 2008「久万高原町発見の遺跡・遺物」『ふたな』5号, 愛媛考古学研究所
- 橋本真紀夫・矢作健二 2009「岩陰の形成過程と遺跡の堆積環境」春成秀爾・小林謙一編『愛媛県上黒岩岩陰の研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』第154集, 国立歴史民俗博物館, 407-411
- 橋本真紀夫・矢作健二 2009「上黒岩岩陰出土石器石材」春成秀爾・小林謙一編『愛媛県上黒岩岩陰の研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』第154集, 国立歴史民俗博物館, 478-484
- 春成秀爾 1983「装身の歴史・採取の時代」『季刊考古学』第5号, 雄山閣出版, 18-22
- 春成秀爾 2002『縄文社会論究』塙書房
- 春成秀爾 2009「装身具」春成秀爾・小林謙一編『愛媛県上黒岩遺跡の研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』第154集, 国立歴史民俗博物館, 213-318
- 春成秀爾・小林謙一編 2009『愛媛県上黒岩遺跡の研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』第154集, 国立歴史民俗博物館
- 林 謙作 2001『縄文社会の考古学』同成社
- 林 謙作 2004「第11章 定住集落の普及」『縄紋時代史Ⅱ』株式会社雄山閣, 205-281
- 兵頭 勲 2009「愛媛地域の打製石器石材利用をめぐる資料集成」『環瀬戸内地域の打製石器石材利用』中四国縄文研究会, 13-38
- 福井勝義 1994「交換・交易の展開と自然の持続性」掛谷誠編『地球に生きる—2 環境の社会化—』雄山閣, 257-266
- ポリスコフスキー, ペェ・イ (岩本義雄訳) 1961「ソ連邦における旧石器時代住居址の研究」『考古学研究』第8巻 第3号 (通巻31号)
- 松本安紀彦編 2005『刈谷我野遺跡Ⅰ』香北町埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集 高知県香北町教育委員会
- 松本安紀彦編 2007『刈谷我野遺跡Ⅱ』香実市文化財調査報告書 第1輯 高知県香実市教育委員会
- 松藤和人編 1999『加茂谷川岩陰遺跡群』同志社大学文学部考古学調査報告 第10冊 同志社大学文学部考古学研究室
- 森田尚宏 1983『銅古屋岩陰遺跡調査報告書—四国横断自動車道建設に伴う発掘調査報告—』高知県教育委員会
- 山崎純男 1999「九州出土先史時代動物遺存体集成—福岡県—」甲元真之編『環東中国海沿岸地域の先史文化 (第2編)』考古学資料集7, 135-145
- 山崎純男 2003「西日本縄文後晩期の農耕再論」『大阪市学芸員等共同研究シンポジウム 日韓初期農耕—関連学問と考古学の試み』大阪市学芸員等共同研究実行委員会, 65-85, 〈追加資料〉1-12
- 米沢容一 1986「台湾・蘭嶼出土の石皿・凹石・敲石」『えとのす』31号, 新日本教育図書, 146-149
- 米沢容一 1996.1「台湾・ヤミ族の伝承と蘭嶼の遺跡—イモルル村を中心として—」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会, 25-50
- 米田 穰 2002「古人骨の化学分析から見た先史人類集団の生業復元」『国立民族学博物館調査報告』33, 国立民族学博物館, 249-255
- 渡辺 仁 1990『縄文式階層化社会』六興出版
- 綿貫俊一 2009「第3部 第2章 石器」第4部 第4章 上黒岩遺跡出土石器」春成秀爾・小林謙一編『愛媛県上黒岩遺跡の研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』第154集, 国立歴史民俗博物館, 127-300, 428-477
- Binford, R.L. 1980, Willow Smoke and Dog's Tails: Hunter-Gatherer Settlement Systems and Archaeological Site Formation, American Antiquity, Vol.45, No.1: 4-20

(大分県立歴史博物館, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2010年9月27日受付, 2011年5月20日審査終了)

---

## **Analysis of the Composition of Stone Implements from the Rock Shelter of Kamikuroiwa**

WATANUKI Shun'ichi

In the Jomon Era, the living or inhabitation style gradually changed from the nomadic life style in the upper Paleolithic Age to the semisedentary or sedentary life style. On the other hand, there are some remains, such as the Rock Shelter of Kamikuroiwa located on a plateau in the Shikoku Mountains that appear not to have been used as a settlement place to live because of the small amount of remains and the narrowness of the rock shelter. So, in order to clarify concretely what actual life in the Rock Shelter of the Kamikuroiwa was like and the characteristics of the Rock Shelter of Kamikuroiwa in the formation of semisedentary colonies and sedentary colonies, the unearthed stone implements and the compositions of the materials of stone implements were studied. So far, in the identification of settlement colonies, attention has been focused on the increase of mill stones and hammer stones and the presence of pit dwellings and soil pits. Differently from the nomadic communities and colonies in the Paleolithic Age where people didn't have fixed dwellings or colonies to settle in, the distribution of materials, typified by salt, jade, polished stone axes and obsidian between remote locations was active and stabilized in sedentary society. From this perspective, the ratio of stone materials from remote areas at the Rock Shelter of Kamikuroiwa and the surrounding remains was obtained.

As a result of the study of the composition of stone materials, it was found that starting at around the 6th layer of the Rock Shelter of Kamikuroiwa at the latest, the use of stone materials from remote areas for stone implements increased, and after that, stone materials that were presumed to have been produced in remote areas were stably imported to the remains in the Kuma Kogen region and around the plains through the Jomon Era. Accordingly, it is presumed that sedentary society started after the 6th layer of the Rock Shelter of Kamikuroiwa and the phase before the 6th layer was at the semisedentary stage.

Key words: stone implements/composition of stone materials, semisedentary/sedentary, short-term camping, means of livelihood